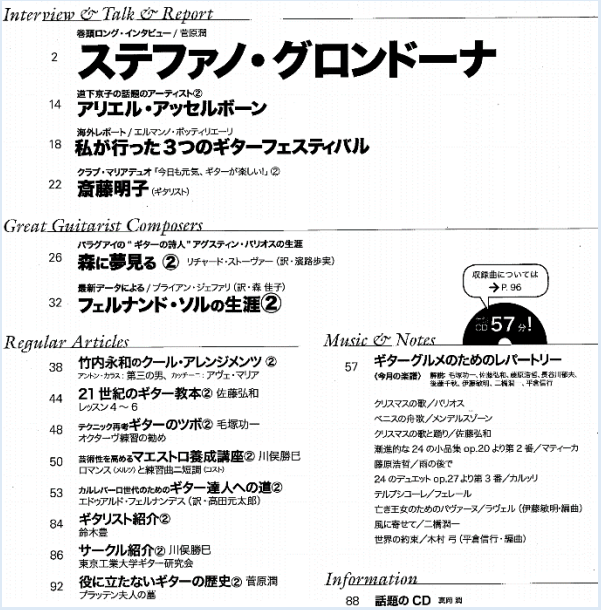
Guitar dream　NO.2(2006.12)の紹介　by yakateru

表紙



メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　ステファノ・グロンドーナ

ステファノ・グロンドーナ（1958 年 － ）はイタリアのギタリスト。オスカー・ギリアに師事。セゴビアにも師事して、セゴビアは、ジョン・ウィリアムズ、オスカー・ギリア、アリリオ・ディアスらとともに、「お気に入りの弟子」としてグロンドーナの名をあげている。グロンドーナ自身がクラシカルギターを始めたきっかけはアンドレス・セゴビアのレコードを聴いたことである。リョベートに強い関心を抱いている。使用楽器：アントニオ・デ・トーレス等・・・。

ジュリン・ブリームの時とは異なり、セゴビアの愛弟子のグロンドーナは、セゴビアをほめたたえている。

- 正直、ピアノを非常に魅力的と感じたんだ。でも、私は、ギターが生み出す言葉が好きなんだ。
- セゴビアが語った今でも忘れられない言葉がある。「私は、ギターを弾くとき愛の心をもって音楽と直接コミュニケートする。ギターを通して音楽を愛している。ギターを弾くということは愛の行為なんだ」と。
- ブリームの講習会にでたことがある。そこで彼にこう言われた。「まるで本物のセゴビアが弾いているみたいだったよ。しかし、なぜ私のところへ来たんだ？」と。私は、答えた。「たぶん何か違ったものを求めてきたんだと思う」と。ブリームは、最高のインスピレーションを与えてくれ、私を大きく成長させてくれた恩人なんだ。
- リョベートは、時代の流れに翻弄され、あまりにもナイーブだった。彼の個性は複雑で、決してギターのみを通じて理解されるものではない。そして、彼の曲は、構造的には単純なのだが、調性は非常に複雑だというところにある。その内容は、信じられないほど濃い。
- 私の友人が、セゴビアは「火」で、リョベートは「水」だと言っていた。

上記の話以外に、グロンドーナが出会った楽器の変遷について語っているのもとても興味深かった。

【森に夢見る（バリオスの生涯）、ソルの生涯　第２回　概要】

- バリオスの２回目は、高校時代の紹介（成績とか・・）。ソルの２回目は、ソルが活躍する以前のスペインのギター事情について多く語られる。面白い記述としては、「18 世紀末において、スペインのギターの地位は高いものでなかった。『ただ、ズンチャッチャと弾くだけの楽器』と言っていた程度だ」と。

【マエストロ養成講座　第２回】

第２回は、メルツのロマンスとコストの練習曲ニ短調。川俣勝巳さんの講座。とても分かりやすい解説です。

【ギター　達人への道　第２回:エドゥアルド・フェルナンデス　抜粋・概要】

（フェルナンデスが伝えるギター達人への道。第２回目は、第 1 回の「メカニズム」に続き、「テクニック」ついて語られる。彼曰く、・・・・・・）

- ギターを弾けるようにする「メカニズム」を用いても、上手に演奏することはできない。難しいパッセージを弾きこなすのに必要なメカニズム様相はすべて備えているにも関わらず、「上手に弾けない」。
- つまり、演奏能力があっても上手に弾けないということは、新しい概念が必要になるということだ。
- この本の目的は、別の意味でいうと、メカニズムが最高の状況にない場合でも、具体的な難所の効率的解決方法を見いだすことにある。

（おっ！すごいことを言い始めているぞ！期待感が高まります！　Yakateru）

- 具体的な解決すべき音楽パッセージの問題では、何が要求されているかを明確に把握する必要がある。
- まず、そのパッセージ自体が持つ音楽的アイデアに合致する運指を見つけ出す必要がある。

（おっ！運指に来ましたか！　ある意味私もそう思う。弾けなかったところの運指を変えるだけで弾けるようになることは多々あります。ただ、それが本質か？　Yakateru）

- 運指は、音符をもっと楽に演奏できる方法を探すのでなく、練習すべきパッセージが持つ音楽的アイデアを楽に実現できる方法を探すことである。
- スケールの練習をいくらやったとしても、アランフェスの 1 楽章（スケール盛りだくさんの楽章です）が弾けるようにはならいということだ。
- まず、心の中の聴力が、発すべき音楽アイデアのイメージを決定し、耳による物理的聴力が、指が紡ぎ出す音響結果を制御することである。

（つまり、・・・オーケストラの指揮者がやるように、まず楽譜を見て自分の頭の中で曲を作っておいて、その頭の中の曲に近づけるようにオーケストラを制御（指揮していく）ということ、ですかねフェルナンドさん）

（次に、「学習」というテーマで語られる。）

- メカニズムの学習は、基本的に２つある。一つは「筋感覚の取得と開発」であり、もう一つは「ネガティブ・スタディ」である。（ここで言う「ネガティブ・スタディ」とは、楽器を使わない練習、先ほどの指揮者のような訓練を言っているようである。「筋感覚」については、なんとなくわかる？？？）

ということで、2 回目は、さらにデープな世界になっている。さて、ついていけるでしょうか。

【その他の注目すべき記事】

- 「21 世紀のギター教本：佐藤弘和」：今からギターを始めようという人、基礎からもう一度やり直そうと考えている人向けの教本。２回目は、半音階とアルペジオの弾き方についての注意事項の話です。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：アントン・カラスの「第三の男」とカッチーニの「アベマリア」のギターソロ編曲譜の紹介。ちなみに、私の蘊蓄紹介ですが、アベ・マリアとは、キリスト教でいうマリアの「受胎告知」の場面で使われる言葉で、『おめでたですよ！』と伝える言葉だそうな。
- 「ギターのツボ：毛塚功一」：初級・中級者向けのに演奏テクニックの再考を行うための記事。第２回も、オクターブ練習の勧めということで、オクターブを中心に添えた和音の演奏法について解説。

その他、「話題のアーティスト」「海外レポート」「クラブ・マリアデュオのインタビュー（今回は、ギタリスト斉藤朋子さんがゲスト）」等もありますが、第２号のメインは、そんなところでしょうか。

また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下記の楽曲が掲載されている。
12 月号ということもあり、クリスマス関連の曲もあります。
また、ラベルの「亡き王女のためのパバーヌ」は、三重奏バージョンです。

Repertoire of Guitarists

ギターグルメのためのレパートリー

付録CDに
模範演奏が
収録されています。

アグスティン・バリオス

クリスマスの歌

パラグアイのクリスマス？　私たちのイメージとは随分と異なるでしょうね。オリジナルではありますがハーモニクス部分を含め種々の版が存在します。長調と短調のアピールに変化を持たせ、曲の持つ「語りかける」ような雰囲気を大切にしたいですね。どこか懐かしい感じが漂う小品です。

（毛塚功一）

フェリックス・メンデルスゾーン

ベニスの舟歌

無言歌とは「歌詞のない歌」、つまり器楽のために作られた歌・・・です。メンデルスゾーンは短い生涯に 50 曲以上の無言歌を残しました。個人的な感情表現を追求し、ロマンティックなピアノの書法が開花した時代の小品です。「ベニスの舟歌」という作曲者自身の表題が付いています。

（毛塚功一）

佐藤弘和

クリスマスの歌と踊り

クリスマスヴァージョンの「歌と踊り」です。歌は言わずもがなの《聖夜（きよしこの夜）》。ただし和声付けを違えたりメロディを断片的にしたりと多少凝って幻想的な雰囲気にしてみました。オクターヴ・ハーモニックスも効果音的に使用しています。また踊りはオリジナルの《パストラール》。明るく弾むような気分を表現してみました。やっぱりクリスマスには静かさと華やかさが共存している聖なるイメージがあります。それにはこのホ長調がぴったり。対照的な 2 曲をひとつの世界にファンタジックにまとめ上げてください！

（佐藤弘和）

ヴェンツェスラウス・マティーカ

漸進的な 24 の小品集 op.20

前回に続いて第2番を収録しました。この曲集には基本的なテクニックが盛りだくさんで、特に重音とアルペジオの練習に最適な教材だと思います。3連音符の速さは、8分音符（低音）の流れを意識することで整えてください。強弱記号も音楽作りにはとても大切な要素です。

（毛塚功一）

藤原浩哲

雨の後で

雨あがりの舗道、朝露に濡れた庭の草花、清々しい空気。雨のあとの感じる空気感を表現できたらと作曲しました。軒から草花からそっと落とす雨の最後の雫までも表現する気持ちで弾いてみて下さい。

（藤原浩哲）

フェルディナンド・カルッリ

24 のデュエット（ギター教則本 op.27 より）

第 3 番は可愛らしい小フーガ。双方に出てくるテーマをはっきり提示することによってここまでシンプルな譜面でも楽しい効果を実感できるでしょう。運指はほぼローポジションですが、音域が広く各弦を渡りしかもアレグロのテンポ指定ですから右手の運指を考えることも重要。初級者にとってはよい課題です。

（長谷川郁夫）

ホセ・フェレール

テルプシコーレ

ホセ・フェレール（1835 ～ 1916）のギター二重奏曲としては最後に出版されたもの。イ短調の序奏の後、この作者特有の美しいメロディーによるワルツの主部となりますが、途中からイ長調に転調し、スラーやカンパネラ奏法により華やかさを増して終わります。テンポや強弱等の指定がありませんので、演奏に際しては序奏に対しワルツは少しアップテンポにした方が効果は上がるかと思います。なお《Terpsichore》とはミューズ神の一人で舞踏の神。

（後藤千秋）

モーリス・ラヴェル

亡き王女のためのパヴァーヌ

ラヴェルの初期の作品で、1899 年ピアノ曲として作曲され 1910 年には管弦楽用にも編曲されました。今回の編曲はピアノ版に忠実なものではなくギターの技巧も取り入れた自由なものです。音色や表現に繊細さが求められますので、ピアノの演奏より管弦楽の演奏が参考になるでしょう（モントゥー指揮）。

（伊藤敏明）

二橋潤一

風に寄せて

《風に寄せて》は木々の葉を揺らし、花々を撫ぜながら渡って行く爽やかな微風を表現した曲です。次々に表情を変える和声の色彩に注意して演奏してください。

（二橋潤一）

木村弓

世界の約束（映画「ハウルの動く城」より）

創刊号に引き続き「ハウルの動く城」からのアレンジです。サントラ唯一のボーカル曲です。心地よい3拍子に乗せ、語りかけるように丁寧にメロディーを弾いてください。メイン・メロ部分の 4th の伴奏のベースは強めに弾き、リズムを安定させます。メロディーから間奏、間奏からメロディーに移るテンポの変化（rit.）は全員の気持ちを揃えて滑らかに聞こえるようにしましょう。

（平倉信行）